

研究ノート

厦門の魯迅と「尊孔」校長林文慶（上）

住家 正芳ⁱ

キーワード：魯迅、林文慶、尊孔、進化

1 魯迅研究における林文慶

魯迅(1881-1936)はいわずと知れた近代中国の有名作家である。それに引きかえ、林文慶(1869-1957)の知名度は高いとは言えない。日本ではほぼ無名であろう¹⁾。この林文慶は20世紀初頭からなかばにかけて、シンガポール社会を牽引した人物の一人である。後ほどやや詳しく経歴を追うが、シンガポールに生まれてイギリスに留学した医師、シンガポールにおける孔教運動の担い手、清朝末期の改革運動の支持者、さまざまな事業に関与した実業家、そして厦門大学の校長、さらには第二次世界大戦中シンガポールを占領した日本軍への協力を強いられた人物と、いくつもの顔を持つ。

魯迅とは厦門大学の校長として短期間、接触を持つが、林文慶にとってあまり名誉な記録のされ方とはなっていない。まず魯迅自身が何度も林文慶のことを「尊孔」だと、侮蔑を込めて書き記している。「尊孔」とは、孔子を尊崇すること、儒教を礼賛することであり、林文慶も加わった孔教運動（「孔教会運動」とも）は、康有為の発想をもとに儒教を国家宗教としようとしたものである。

また、魯迅については膨大な研究および資料の蓄積があり、わずか4ヶ月ほどの厦門滞在期間につい

ても複数の資料集が編まれているが、そこで林文慶はいわば悪役として描かれている。魯迅が短期間で厦門を去った大きな要因のひとつとして、尊孔の林文慶への反発があったというのである。

魯迅先生はなぜ厦大を去ったのか？当時の我々の理解では、「英国籍の中国人」であり、尊孔の林文慶校長や、国学院の教務長である劉樹杞および国学院の「現代評論」派の連中どもに対する不満、さらには憎悪が原因だった。（俞[1956]1983：62）

「国学院」とは、厦門大学に設置された国学研究院のことである。厦門大学での魯迅は文科国文系教授と兼任で国学研究院の研究教授となっていた。もちろん、「魯迅」はペンネームなので、教授としては「周樹人」である。

「英国籍の中国人」とは、魯迅が林文慶を説明する際に用いた表現であり、林文慶がイギリスの植民地であるシンガポール出身の華人であることを指しているが、これに続けて「口を開けば孔子のことばかり」（3巻：399）²⁾と評しているように、客観的な事実の描写というよりは揶揄の口調であって、上掲の引用もそうした意味合いを引き継いでいると思われる。

加えて、別の人物の回想では、医者のかせに犬に噛まれた子供も救えなかったと非難され、林文慶は

i 立命館大学産業社会学部教授

医師として、さも無能であったかのような書かれ方もされている(陳夢韶 1983a: 90)。

さらに、尊孔の林文慶との衝突を強調することは、「革命的」な魯迅像を強調することとも不可分であった。たとえば、後ほど紹介する講演「中国の書物はあまり読まぬこと、おせっかい焼きたること」について、以下のように評しているものがある。

戦いの光芒またたく魯迅の演説は、「青年必読書」の論戦を引き継いだものであり、尊孔復古の逆流に対する有力な反撃である。彼〔魯迅〕³⁾は「五四」新文化運動の正確な方向を堅持していたのであり、革命闘争の激流の中にある青年を鼓舞し、勇気を振るい起こして前進していたのである。(廈門大学中文系 1978: 43)

孔子・儒教を批判する進歩的な魯迅像を強調することは、その真逆を行く保守反動的な悪役として林文慶を際立たせる構図となるのである。

こうした林文慶像について嚴春宝は、顧頡剛らとの人間関係こそが、魯迅が廈門大学を去ったもっとも大きな要因であり(嚴 2010: 185)、林文慶との関係はさほど重きをなしていないと主張する(嚴 2010: 188)。Wang Gungwu も同様の見解を示している(Wang 1991: 148)。顧頡剛は胡適らの現代評論派に連なる人物であり、魯迅は廈門に来る以前からこの現代評論派と対立関係にあった。魯迅の書き残したのものにも胡適らに対する嫌悪は隠されていない。

たしかに、魯迅の尊孔批判にしても廈門に来る以前からのものであり、尊孔として嫌悪すべきは、なにも林文慶だけではない。廈門以外にもいくらかでも存在したわけだから、校長が尊孔だという点が廈門を去る特に大きな要因だったとは考えにくい。魯迅が林文慶を面と向かって批判したのも、大学の予算への不満からであって、尊孔に絡んだものではない(11巻: 215)。

魯迅は『古小説鈞沈』など、営利出版にはそぐわ

ない資料集を世に出すために廈門大学の資金をあてにしていた。だが、赴任してみると予算削減の話ばかりで目処が立たず、同僚とは反りが合わないし、食べ物も口に合わない(11巻: 117)。そんな廈門に長居してもしようがないと思わざるを得なかったのであろう。

とはいえ嚴春宝は、魯迅の廈門滞在がもっと長くなっていけば林文慶との正面衝突は避けられなかっただろうとも指摘している(嚴 2010: 200)。魯迅が廈門を去った主な要因が何であったにせよ、二人の思想がぶつかるものであったことは明らかなのである。

そこで、本稿は林文慶研究の一環として、廈門滞在中の魯迅と林文慶の言動を示す資料および、それに関連するものを訳出して時系列的に整理し、両者の儒教・孔子および進化についての考え方の違いを確認することで、林文慶の思想の同時代的な位置づけを探ることとする。

2 魯迅の廈門赴任までの林文慶

2-1 シンガポールからイギリスへ

最初に林文慶についてやや詳しく経歴を追ってみたい⁴⁾。林文慶、あごなは夢琴、英語表記 Lim Boon Keng は、いわゆるプラナカン、すなわちマレー半島に定住した華人3世である⁵⁾。

祖父、林瑪澎(Lim Mah Peng)は1839年に福建の海澄(廈門の対岸)からイギリスの海峡植民地だったペナンへ渡った人物で、現地生まれの華人女性と結婚した。夫婦の唯一の子である林天堯(Lim Thean Geow)もマラッカ生まれの華人女性と結婚した。林文慶はその第3子として、1869年10月18日にシンガポールで生まれた。上に2人の兄、下に2人の弟と4人の妹がいる。

林文慶の母も祖母も現地生まれの華人女性であり、こうした女性をニョニヤ(Nyonya、娘惹)と呼ぶ。男性の場合はババ(Baba、峇峇)と呼ばれ、林文慶は第2世代のババということになる。ほかにプラナ

カンという呼び方もあり、血統や文化の現地化が進んで、言語もマレー語や英語になっている人が多かった。林文慶の家庭で使われていたのも、マレー語に福建方言の中国語が混ざったババ・マレー語であったという。

林文慶は初め、福建会館に附設された学校で四書など中国古典を学ぶが、すぐに官立の英語学校に入り、さらにスタンフォード・ラッフルズが設立したラッフルズ学院に移る。そのため、教育はもっぱら英語で受けることになる。

学業は優秀で、1887年、18歳の時に海峡植民地の華人子弟として初めて、女王奨学金を獲得することになる。これはイギリス海峡植民地政府が現地の学生のために設けた奨学金で、林文慶はこの奨学金によって、スコットランドのエディンバラ大学で医学を学ぶ。エディンバラ大学医学部ではかつて、チャールズ・ダーウィンやコナン・ドイルが学んでおり、林文慶以前にも中国系の留学生在がいた。

林文慶は幼少期に中国語教育を受けたとはいえず、福建方言によるものでレベルは低く、長期にわたって英語教育を受けた影響で、中国語（マンダリン）は分からなかった。そのため、中国出身の他の留学生とは交流できず、彼らからも中国人とは見做されなかった。

またある時、一人の教師から中国語の文章の翻訳を依頼されたが、林文慶にはその能力がなく、恥じ入るばかりだった。こうした経験から発奮した林文慶は、中国語・中国文化に精通すべく、時間が空くと中国語の書籍を数多く所有しているイギリス人学者の家で読書に励んだという。

1892年、23歳で内科の学士の学位と外科の修士学位を取得し、成績優秀者として賞を得る。卒業後、ケンブリッジ大学で半年間、研究に従事するが、資金不足のため帰国を余儀なくされる。

2-2 シンガポールにて

1893年5月にシンガポールへ戻り、診療所を開業。イギリスで医学の学位を得た、海峡植民地では初の

華人ということになる。1895年には海峡植民地総督からの委任を受け、シンガポール立法議会の華人委員となる。その後、1898年、1901年、1915年には立法会議員となっている。

1896年3月に宋旺相（Song Ong Siang）らと、社会問題についての啓蒙団体「華人好学会」（Chinese Philomathic Society）を設立。4月、シンガポールに立ち寄った李鴻章を招いた総督主催の宴席に招かれている。この年の12月29日には、黄端瓊とオーチャード・プレスビテリアン教会で結婚している。黄端瓊はキリスト教徒で、幼い頃から中国語を学ぶとともにイギリス式の教育を受けた女性であった。その父の黄乃裳（Wong Nai Siong）は福建出身のやはりキリスト教徒で、この後、康有為の改革運動を支持し、さらに後にはボルネオ島のシブに華人入植地を開設する人物である。

1897年4月、宋旺相（Song Ong Siang）とともに英字誌 *Straits Chinese Magazine*（海峡華人雑誌）を創刊する。この雑誌は林文慶が儒教を称揚する論文を発表していく舞台となり、1907年に資金難のため停刊するまで続く。1898年、同誌に「辮髮問題」を発表して剪辮運動（辮髮廃止運動）を開始し、華人社会に大きな議論を引き起こすことになる。この1898年には聯華ゴム有限会社の設立を働きかけ、理事となっている。

1899年、新聞『星報』の経営を引き継ぎ『日新報』と改名。自宅で中国語学習塾を始め、南洋華人にとって初の女子学校となるシンガポール華人女子学校の創設にあたって校舎建設のための土地を寄付するなど、教育事業にも関与する。

1900年2月、戊戌政変後、清朝に懸賞金を掛けられた康有為がシンガポールへ渡って植民地政庁の保護下に置かれた際、植民地政庁と康有為との仲介役となっている（持田 2017：91）。同じ年の8月には、宋旺相、陳若錦（Tan Jiak Kim）らとともに、イギリスへの忠誠を呼びかける海峡英籍華人公会（Straits Chinese British Association）を設立。

1901年、義和団の乱における公使殺害を謝罪する

ためドイツに派遣された醇親王載灃がシンガポールに立ち寄り、主要な華人人士と面会した際、出席して頌詩を献じた。しかし一方でこの年には、清朝を批判した *The Chinese Crisis from Within* (London: Grant Richards) を匿名で刊行している。また同じ年に、シンガポール義勇軍歩兵团華人連隊に加入し、翌1902年にはその代表の一人としてロンドンへ赴き、エドワード7世の戴冠式に参列して戴冠記念メダルを授与されている。

1905年、海峡植民地およびマレー連邦官立医科学校（シンガポール国立大学医学部の前身）の創設に参与し、理事となる。1907年から1911年の間には薬物学と治療学を教授する。12月21日、妻の黄端瓊が病により逝去。可勝、可明、可能、可卿（可料）の4人の男子が残される。

1906年、清朝政府の督学としてジャワへ赴き、華人に対して学校の創設と、華語を共通語として採用することを訴える。一方で同年、シンガポールにて中国同盟会に加入し、辮髪、婦女子の纏足、アヘンに対する反対運動を主導している。この年、母校ラッフルズ学院の校長となる。

1908年4月、厦門にて殷碧霞と結婚。殷碧霞は厦門生まれ。漳州中西学校と福州のアメリカ・メソジスト教会の英語女学校で学んだ後、英語教師をしていた。一男（炳漢）一女（月卿）を得るが、この結婚はうまくいかず、林文慶はほかに婚外子として一男（炳添）を設けることになる。

1911年、ロンドンでの「第一回世界人種代表大会」とドレスデンでの「世界衛生会議」に出席。『普通衛生講義』（シンガポール：中華商務總會）を出版。

1912年、孫文の要請により、孫文の秘書兼主治医となり、南京臨時政府内務部衛生局局長に就くが、孫文が臨時大總統を辞任した後、シンガポールへ戻る。この年には林秉祥、李俊源らとともに華商銀行を創設し、理事会副主席となっており、翌1913年にはシンガポール華人たちの出資で成立した聯東保險有限公司に林文慶も出資するなど、金融保険業に関与する。この後、和豊銀行、華僑銀行などに関わること

になる。

1914年3月、『民国必要 孔教大綱』（上海：中華書局）出版。実得力孔教会（後の南洋孔教会）の理事として設立に参加。第一次世界大戦が始まると、1915年に *Duty to the British Empire (Being an Elementary Guide for Straits Chinese) During the Great War* (Singapore: Straits Chinese British Association) の執筆者の一人となる。1917年にシンガポール義勇軍団華人支隊を組織し、イギリスの対ドイツ戦を支持する。 *The Great War from the Confucian Point of View, and Kindred Topics* (Singapore: The Straits Albion Press) 刊行。戦後の1919年、イギリス政府より大英帝国四等勲章を受け、香港大学より名誉法学博士の学位を受ける。

2-3 厦門大学へ

1921年6月、林文慶は陳嘉庚の誘いを受け、厦門大学の校長を引き受ける。50歳を超えての転身ということになる。

陳嘉庚 (Tan Kah Kee) は現在の厦門市の出身で、16歳の時からシンガポールへ渡って父の仕事を手伝い、パイナップルの缶詰や天然ゴム事業で成功した人物である。事業での成功をもとに故郷に小学校、中学校、師範学校、専門学校などを創設し、教育事業に注力した。厦門大学の創設は中でも最大の教育事業となる。1910年春に中国同盟会シンガポール分会に加入。天然ゴム事業を始める過程で林文慶の助けを得たことから、交友を深めていた。厦門大学は当初、劉萃英を校長に招聘して、1921年4月6日に開学式を挙行していたが、5月に劉萃英が辞職したため、林文慶が後任を引き受けることとなった。

林文慶は7月4日に厦門大学での執務を開始している。学生の英語レベル向上を重視して自ら学生に対して英語の口頭試験を行い、厦門大学の目的と校章を制定し、欧米の例にならって教師と学生との午後の集いを設けるなど、校長としての仕事に意欲的に取り組んでいる。12月末から翌年3月11日までシンガポールへ戻り、陳嘉庚と大学の方向性などを協

議し、大学への寄付を募集する。この後も林文慶は厦門とシンガポールの間を行き来しながら厦門大学の理事である陳嘉庚との協議、そして寄付の呼び掛けを続けることとなる。

しかし、1924年に第一次学生運動が起こる。この年の4月6日、厦門大学の創立3周年の記念にあたって、林文慶は儒教および伝統文化の価値を称揚する演説を行う。すると、4月14日、この演説が上海の『民国日報』誌上において、林文慶は南洋で外国資本家に媚びておきながら中国文化を称揚していると批判される。この報道が引き金となって、学生の間にも林文慶に対して、思想が陳腐で学校の名譽を傷つけているとの批判が起こる。これに対して林文慶が学生たちを背後で扇動している教員4名の解雇を発表したことから、学生だけでなく教員の間にも反発が広がる。5月30日には講義をボイコットした学生たちが林文慶や他の教員を批判する大会を開く。6月に入って林文慶は調停を続けるが、結局多くの学生が厦門大学を去ることになる。この第1次学生運動の前後で、高等学校も含めた厦門大学の全学生数は346名（内大学生204名）から202名（内大学生118名）に減少した。

その後、1926年6月22日に第一期生の卒業式が行われ、35名が卒業する。そして、かねてから検討していた国学研究院の設置が動き出し、魯迅はそのメンバーの一人として招聘されることとなる。

3 厦門以前の魯迅

かくして魯迅は厦門大学に赴任することになるわけだが、それまでの魯迅は北京で政府の教育部の課長クラスの職員として働くかたわら、北京大学や北京女子師範大学で教鞭をとっていた⁶⁾。よく知られているように、さらにそれ以前、若き日の魯迅は日本に留学している。仙台医学専門学校での恩師について綴った「藤野先生」が書かれたのは厦門滞在中である。留学から帰国後、故郷の紹興や杭州で教師をした後、北京で教育部の職に就いた。

1925年、魯迅が非常勤講師を勤めていた北京女子師範大学に、良妻賢母主義の保守的な教育観の持ち主が校長として送り込まれたことから、それに反発した学生の抗議運動が発生する（女師大事件）。魯迅は学生の側に立って抗議運動に加わり、一時的にはあるが教育部の職を罷免されている。この北京女子師範大学の教え子であり、学生側のリーダーだった許広平と交わした往復書簡が、魯迅の厦門時代の資料ともなる『兩地書』である。許広平はその後、上海で魯迅と暮らし、一人息子の周海嬰を生むことになる。

翌1926年3月18日には、日本の内政干渉に抗議し、段祺瑞の軍閥政府に強硬な対応を求めた学生デモが行われるが、これに対して軍が発砲し、47名が死亡する事件が発生した（三・一八事件）。その中に魯迅の北京女子師範大学での教え子二人が含まれており、これを魯迅は「民国以来もっとも暗黒な一日」（3巻:264）として、軍閥政府を批判。そのため指名手配リストに載せられたことから、5月まで日本人やドイツ人の経営する病院に潜伏することになる。こうしたところに厦門大学への招聘の話が持ち込まれ、7月28日、魯迅は正式にそれを受け入れた。

魯迅が『新青年』誌上に「狂人日記」を発表して作家としてデビューしたのは1918年であり、1921年暮れに「阿Q正伝」の連載を開始。それらを含む短編集『吶喊』を1923年に世に出していた。厦門大学に赴任した頃の魯迅はすでに有名人であり、厦門大学への赴任も『申報』などの新聞紙上で報じられていた（薛1983:9-12）。

4 厦門の魯迅

4-1 1926年9月

以下、厦門滞在中の日程を追うかたちで魯迅の言動⁷⁾、および同時期の林文慶の演説を見ていくこととする。

1926年8月26日、魯迅は北京を離れ、南京経由で28日に上海に入る。9月1日の夜、上海から船に乗

り、4日に厦門に到着。しばらくの間、大学内の生物学院大樓の3階に居住し、同月25日には同じく大学構内の集美樓の部屋へ引っ越している。

9月8日、後に追想を記す俞荻が魯迅を訪問している。この時のことを俞荻は次のように記している。

私は勇気を出して96段の階段⁸⁾を上がり、生物学院3階にある魯迅先生の臨時の住まいを尋ねた。〔中略〕魯迅先生は厦門へ来てまだ5日だったので、私がいに行った時はちょうど書籍を整理されているところだった。私がそと「魯迅先生！」と呼びかけると、先生は歩み寄って微笑みながら握手をしてくれた。〔中略〕先生は少しももったいぶったところのない素朴な人で、教師としては近づきやすく、気さくで親しみやすい方だった。私は先生に、この数年来、先生の作品を愛読していることや、厦門大学の現況、厦門大学の未来についての希望を話した。私が厦門大学の校長である林文慶は復古や尊孔を提唱していて、学生はいまだに文語体で文章を書いていることを話した時、先生はとても驚き、ユーモラスにちょっと笑って「それは変えないといけないね！」と言った。先生はまた、親しみのこもった眼差しで私を見ると、「焦ることはないよ！これからは読書や創作については、私があなたたちの手助けをしよう！」と、きっぱりと言ってくれた。(俞 [1956]1983: 57-58)

魯迅の日記にも「俞念遠〔俞荻のこと〕来る」(14巻:615)と書かれており、魯迅は到着早々、林文慶の「尊孔」について聞き及んでいたことになる。

9月20日、厦門大学の始業式に出席。翌々日から授業が始まる。魯迅の担当は「小説選および小説史」、「文学史綱要」、「声韻文字訓詁研究」。このうち「声韻文字訓詁研究」は履修者が無く閉講となる(11巻:123)。

9月23日、「厦門通信」を書く。海辺にある大学のまわりの景色について、悪くはないとしつつも、「私

は自然の美に対しては残念ながらまるで敏感ではなく、よい季節、よい風景にありがたくも出会ったとしても、たいして感動することはありません」(3巻:369)として、あまり関心は示さない。

その一方で、鄭成功の遺跡が荒れるがままにされていることを嘆き、そのことを尊孔・経書尊重派への批判にからめる。

しかし、何日も経つというのに鄭成功の遺跡は忘れることができません。私の住んでいるところから遠くない場所に城壁があり、彼が築いたものだとのことです。台湾を除けば、この厦門こそ、満人が関内に入ってから、我が中国が最後に滅んだ場所であることに思いいたり、実に悲喜こもごもです。台湾は1683年、すなわちいわゆる「聖祖仁皇帝」22年に至ってついに滅びますが、この年、「仁皇帝」たちは『十三経』と『二十一史』の版木をまさに補修したのでした。現在、一部の国民は経書を読みながら、殿版『二十一史』も宝物扱いされるようになり、貴重古書の蔵書家は金に糸目をつけずに買い込んで子孫に残すとか。ところが、鄭成功の城は寂しいものです。聞けば、城の下の砂はこっそり盗み取られて対岸の鼓浪嶼の誰かに売られており、じきに城の土台が危うくなるとのことです。(3巻:369)

9月28日づけ『兩地書』(48)には、さっそく林文慶について否定的なことが書かれている。

玉堂〔林語堂〕は国学院について、熱心でないとは言えませんが、私の見るところ、あまり希望は持てません。第一に人材がなく、第二に校長がいささか掣肘を加えている(私にはそう感じられる)。(11巻:133)

玉堂こと林語堂は、かねてより魯迅と親交があり、この時は国学院の総秘書として責任者のような立場

にあった。

4-2 孔子聖誕恭祝会（1926年10月）

10月3日、この日午前10時から厦門大学内の群賢楼の大礼堂で、孔子の誕生を「聖誕」として祝う会が催される。『厦大周刊』に掲載された記事によると、校長以下の教職員と学生全体およそ400人あまりが参加し、会場には飾り付けられた「恭祝聖誕」の4字が掲げられていた。合図とともに全員が会場に入ると、司会者が林文慶校長に演説を促した。林文慶の演説は「孔子の学説は現代社会に適しているか否か」と題するもの。

この時、林文慶は英語で話し、通訳がついた。もともとは英語を使うつもりではなかったが、「いかにせん自分は国語〔中国語〕に長じておらず、意を尽くすことができない恐れがあるため、より習熟している英語で話すことにした」（『厦大周刊』158期:4）、という。以下が記事に紹介されている林文慶の演説であり、中国語で記録されている⁹⁾。

今日、話をするこの題目の〔孔子の学説は現代社会に適しているか否か〕という問いについて、私は申し分のない答えを得たいと思っているが、まずは孔子の学説の真理としての価値、その根本の目的はつまるところどこにあるのか、を理解せねばならない。このことが明らかになれば、この題目の答えはおおかたははっきりすることだろう。私の考えでは、〔孔子の学説の価値、目的は〕おおかた3つに分けられる。

(1) 孔子の宗教観念および哲学観念

現在の中国には新たな学問を研究する者がすこぶる多く、西欧文化の影響を受け、孔子〔の学説〕は宗教ではないと見做している。こうした説は1840年よりこのかた異口同音、たびたび耳にするが、理由とされるのは、孔子の著作の中に鬼神についての言及がほとんど無いということであり、〔孔子は〕良き道德の師としか呼べないのだという。しかし実のところ、こういった

考えは大間違いであり、孔子の学説が現実を重視したものであって、荒唐無稽な話で人を騙すようなものとは比べようもないことを知らないのである。孔子の学説は、当時の国家や社会に現れたすべての事象を深く研究するだけでなく、古代からさらに過去のできごとについてもじっくりと懸命に観察し、隠された真理を徹底的に探究することで、「一以て之を貫く」¹⁰⁾となったのである。ゆえに孔子の学説は実に千古不滅の学説なのである。

(2) 道德

孔子の〔説く〕道德は家庭を起点として、しだいに社会、国家、天下へ及ぶ。その根本はすべて「孝」の一字にある。現在、西欧各国もまたしきりにこの考え方に賛同しており、最近のいわゆる博愛主義などは、すべて家庭を起点としている。ゆえに我が国の孔子の道德の根本は、各国よりも実に優れたものなのである。さらに、その学説はあらゆる人が実践できるものであり、口先ばかりで何もしないようなものとは比べようもない。

(3) 政治

我が国の人々が孔子の学説に対してもっとも不満を抱くのがこの点であるが、そのように思う者は孔子について本当のところを知らないのである。孔子の時代、孔子が主張した君主を尊重せよという学説は、今我々が不満を抱き、反対する帝国主義とはまったく異なるものである。ために私が師と仰ぐ孟子の説いた「民を貴しと為す」¹¹⁾について考えてみても、この一言からその〔儒教の〕政治に対する主張の概略が分かる¹²⁾。その根本の主張は世界を大同〔公平で平和な理想世界〕へ進めるといふ点にあり、これもまた現代に適したものである。（『厦大周刊』158期：4-5）

最後の、君主を尊重することと帝国主義との関連は論旨が不明だが、帝国主義を代表するイギリスで

学び、勲章も受けている校長がこうした話をするのを聞いて、奇妙な感じを抱く学生がいたとしても、おかしくはないと思える。

この後、七弦琴の演奏が行われ、さらに顧頡剛が「孔子はなぜ聖人となったのか」と題して講演し、「各種の書籍からの引用によって聖人の聖たるゆえんを明らかにした」(「厦大周刊」158期:5)という。七弦琴は古琴ともいい、孔子が好んだとされる。伝統的に中国の文人のたしなみとされる「琴棋書画」の筆頭に位置づけられるものであり、これもきわめて尊孔的な演出ということになる。

この日、10月3日づけの魯迅の日記には、「日曜。曇。午前、羅常培君来訪」(14巻:618)とあるのみで、魯迅は出席しなかったのかもしれないが、林文慶や顧頡剛の話の内容が魯迅にとっていまましいものであることは明らかである。

林文慶のこの演説の翌日、4日づけの『両地書』(50)には、「校長是尊孔的」との記述が登場する。

校長は尊孔です。私と兼士に対しては、まだ別に何をしてくるわけでもありませんが、ずいぶんと金をかけたので、その分の効果を挙げようとあくせくしていて、まるでよい草を食ばさせた牛からはミルクを搾らねばといった調子です。(11巻:141)

兼士は沈兼士のこと、厦門大学国学系主任。魯迅とは以前からの知り合いで、魯迅が厦門大学を去ると、沈兼士も辞職することになる。

10月8日、「雑記」を書く。この中で、南京での学生時代に進化論に触れたことが書かれており、その頃「私も中国に『天演論』という本があることを知った」(2巻:305-306)という。『天演論』は厳復がハクスリーの『進化と倫理』の翻訳に独自の見解も盛り込んで進化論を紹介したもので、1897年に雑誌上で発表され、1898年に単行本化された。当時の学生や知識人に多大な影響を与えており、魯迅も新奇な着想に魅了され、一気に読んだといい、「暇さえあ

れば、例によって焼きパンや、落花生、唐辛子などをかじりながら『天演論』を読んだ」(2巻:306)という。

魯迅は1907年に東京で刊行されていた月刊誌『河南』に、令飛のペンネームで「人の歴史」と題して進化論を解説する文章を寄せている(1巻:8-24)。また、1919年の「我々は今いかにして父親となるか」(1巻:129-143)でも進化論に言及している。

10月10日、国学研究院の設立大会が開かれる。陳列室に魯迅が収集していた拓本が陳列される。この時、厦門大学当局の準備や補助が不十分であったことから、『両地書』(53)に「この学校当局は、かなりの金額を出して教員を呼ぶけれども、教員を手品師のように思っているきらいがあり、何もなところで腕前を披露させようとはします」(11巻:148)と、大学当局への不満を記している。そして、「ここでの生活は実に無聊です。よそから来た教員で長くいるつもりの人は誰一人いません」(11巻:149)と嘆いている。

この二日後の12日、「藤野先生」が書かれている。

4-3 「中国の書物はあまり読まぬこと、おせっかい焼きたること」(1926年10月)

10月14日午前、厦門大学の週会で講演する。内容は「中国の書物はあまり読まぬこと」と「おせっかい焼き(好事之徒)たること」の二つの部分から成る。ただし、これは魯迅本人が記録したものではない。

今日の私の講演は「中国の書物はあまり読まぬこと、おせっかい焼きたること」と題しています。私がこの学校に来たのは、国学研究院で研究し、中国文学史を講義するためであり、本来は皆さんに対して古典に没頭し、中国の書物をたくさん読むよう勧めるべき立場です。しかし、私は北京で、経書を読むことを主張し、復古を提唱する者を目にしました。ここに来てからも、いつも『古文觀止』を抱えて放さないよ

うな人を何人か目にします。このことから私は、中国の書を多く読むより、あまり読まないほうがよいと考えるようになりました。

尊孔、崇儒、経書の学習、復古、これらによってこそ中国は救われる。こういった論調が近頃どんどん声高に唱えられています。その実、過去に経書を読めと主張していた人たちには、たいてい別の下心があったものです。彼らは人々に経書を読むことで、親孝行で従順な民となること、節操をかたく守る女子となることを求め、そうすることで自分はふんぞりかえって好き勝手にやり、人々を踏みつけにすることができたのです。彼らはいつも経書を学んだことを鼻にかけ、中国の古い文化を自慢しています。だがしかし、彼らは五・三〇事件を引き起こした日本兵を『論語』で感化できたでしょうか、三・一八事件の前夜、大沽を砲撃した八カ国連合軍の戦艦を『易経』のまじないで沈めることができたでしょうか？

君たち若い学生は、多くが愛国的で、国を救いたいと思っているでしょう。だが今日の中国を救うには、中国の書物をたくさん読んでいる場合ではありません。逆に、しばらくは読まないほうがよいと私は思います。中国の書物を読まなくても、文章を書くのが少しばかり下手になるだけのことで、たいしたことではありません。中国の書物をたくさん読むことの弊害は、少なくとも以下の三つです。一、中国の書物を読めば読むほど、意志が奮い立たなくなる。二、中国の書物を読めば読むほど、平穏な道を歩みたくなり冒険しようとしなくなる。三、中国の書物を読めば読むほど、思想がぼんやりしてしまい、是非の区別がつかなくなる。こうなってしまふからこそ、私は窓辺〔の勉強場所〕を指して、生きた人の墓であると言うのであり、中国の書物をたくさん読む必要はないと勧めるわけです。

君たち若い学生は、多くが勉強好きでしょう。

書物を読むのが好きなのはよいのですが、「死んだ書物を読む」のではなく、柔軟に活用する必要があります。「死んだ書物を読む」のではなく、世の中の出来事にも関心を向けなくてははいけません。「死んだ書物を読む」のではなく、体の健康にも注意しなくてははいけません。書物にはよいものもあれば悪いものもあります。信頼できるものもあれば、信頼できないものもあります。古人いわく「尽く書を信ずれば、書なきに及ばず」¹³⁾。これは古代の史実の信憑性にもとづいて言われたものです。私の言う、信じられるものもあれば、信じられないものもあるという話は、いにしへの書の考え方にもとづいて言っていることになります。あなたたちは、しばらくの間は中国の古い書物はあまり読まなくてよろしい。もし読まなくてはならない場合は、しっかりと見極め、批判し、カスは捨てて、精華を取り出すこと、これらをけっして忘れてはなりません。

次に、私はあなたたちに「おせっかい焼き」になることを勧めようと思います。おせっかいについて世の人は往々にして不快に感じ、「おせっかい」のことを「事あるごとに波風を立てる」といった意味に理解していますが、本当のところはそうではありません。私は、今日の中国にはこうした「おせっかい焼き」はむしろ多いほうがよいと思っています。社会のあらゆるものは、おせっかいな人がいてこそ、古いものが除かれ新しいものが出て来て、日に日に発達するのです。コロンブスの新大陸発見やナンセンの北極探検など、科学者たちのさまざまな新発見について見てみると、彼らのやり遂げたことは、どれもおせっかいから達成されたものです。本校のように、もともとは荒れ果てた場所だったところに校舎を建てて学生を集めるというのも、実におせっかいというものです。なので、私は「おせっかい焼き」というのは、実は邪魔になるようなものではないと考えるのです。

この学校の運動場にはいつも運動している人がいて、図書館の中国図書の閲覧室も新聞や書物を読む人でいつもいっぱいです。もちろんこれはよいことです。しかし、西洋図書の閲覧室にある新聞や雑誌は、まるで重要ではないかのように読む人がほとんどいません。おせっかいということが分かっていないから、こういうことになるのです。西洋の新聞雑誌を読まなくてもたいしたことではありませんが、授業の無いときにたまたまちょっとめくってみるだけでも、実に多くの知識を増やすことができるものです。なので、私は諸君には、すべての科学に対していつも注意を向けておくことを望みます。甲科を学ぶ人は乙科の書籍からあらましを学ぶことができるでしょう。当然、正課を妨げない限りで、ということにはなりますが。こうすることで、あらゆることについてあらましを知ることができるのであり、卒業してからも社会でよりよい仕事ができることでしょう。

とはいえ、人それぞれの考え方や境遇は違いますから、私は何もすべての人に大きなことを成し遂げるおせっかい焼きになれと勧めているわけではありません。ちょっとしたおせっかいであっても、やってみるとよいのです。たとえば、たまたま出くわしたことについて、ちょっと手を加えてみる、といったことです。ですが、こうした小さな事であっても、いつもいつも気に留めておくというのは、なかなかできないものです。もしできないのであれば、我々は「おせっかい焼き」のことを、まわりに流されて嘲りののしるべきではありませんし、特に失敗した「おせっかい焼き」のことを嘲笑したり軽蔑したりすべきではないのです！（陈梦韶 1983b: 94-96）

講演の記録として大学の発行する『厦大周刊』に紹介されたのは後半の「おせっかい焼きたること」の部分の概要のみで、前半の「中国の書物はあまり

読まぬこと」は校長の意に反するとされたのか、省かれていた。その後、林文慶が講演を依頼しても、鲁迅はすべて婉曲に断ったという（陈梦韶 1983b: 96-97）。先に挙げた林文慶の演説と同じく、孟子・尽心章句下から引用しているのは皮肉と取れなくもない。

本稿冒頭で引用した文献で、この講演は「青年必読書」を引き継いだものとされていたように、「中国の書物はあまり読まぬこと」の部分は、もともと1925年2月に発表され、『華蓋集』に取められた「青年必読書」の内容を繰り返したものである。

この「青年必読書」は、『京報副刊』という新聞のアンケートへの回答だが、問われている「青年の必読書」そのものについては「これまで気にしたことがないので、今は答えられない」（3巻:12）としつつ、「中国の書物はあまり読まぬこと」のもとなることが書かれている。

私は中国の書物を読むと、いつも気持ちが沈んでいってしまって、実人生と離れていくような気がする。外国の書物——ただしインドを除いて——を読むと、人生に触れることが多く、何かちょっと仕事をしてみたくなる。

中国の書物にも、世の中に出よう人に勧めるものはあるが、たいていはキョンシーの楽観¹⁴⁾である。外国の書物は、たとえ退廃的であったり厭世的であったりしても、生きた人間の退廃や厭世である。

私は、あまり——あるいはまったく——中国の書物は読まず、外国の書物を多く読むのがよいと思う。

あまり中国の書物を読まなくても、その結果はせいぜい文章が書けなくなるくらいのものだ。だが、今の青年にとって最も重要なのは「行」であって、「言」ではない。生きた人間でありさえすれば、文章が書けなくてもどうということはない。（3巻:12）

また、「彼らは五・三〇事件を引き起こした日本兵を『論語』で感化できたでしょうか、三・一八事件の前夜、大沽を砲撃した八カ国連合軍の戦艦を『易経』のまじないで沈めることができたでしょうか？」という部分は、1925年11月27日発行の『猛進』第39期に掲載された「民国十四年の『経書を読め』論」が下敷きとなっている。そこでは、「『論語』でドイツ兵を感化させたり、『易経』のまじないで潜水艇を沈めることができたでしょうか？」（3巻：127）となっている。

この「民国十四年の『経書を読め』論」は、1925年11月2日、章士釗が議長をつとめる教育部の会議で、小学校で経書を読ませることが決議されたことを批判したもので（3巻：130-1注2）、厦門大学での講演以上に痛烈である。

何人かの、この上なく愚かな鈍牛のようなのだが、経書を読もうなどと本気でまともに主張できるのだ。しかも、こんな手合いとは討論するまでもない。彼らは経書だの、いにしえだのと言っているが、実は大声でから騒ぎをしているだけだ。彼らに、経書は誰のように読むべきか、顔回か、子思か、孟軻か、朱熹か、秦檜か（彼は状元だった）、王守仁か、徐世昌か、曹錕かと問うても、いにしえとは、清（すなわち、いわゆる「本朝」）、元、金、唐、漢、禹湯文武周公、無懷氏、葛天氏、どこまで遡るのかと問うても、彼らには実はまったく定見がない。顔回から曹錕までがどういう人なのか、「本朝」から葛天氏までがどういう時代だったのか、ということも彼らはよく分かっていない。蠅どもがゴミ溜めを失ってブンブン鳴いているようなものに過ぎない。（3巻：127-8）

ここでの魯迅の揶揄にはもう一捻りある。魯迅は、こんな連中は鈍牛だから影響力を持つことなどない、とする。もし影響力のある人、すなわちお偉方が経書を読めなどと言っているのであれば、そうした人

たちは鈍牛ではないのだから、本気で経書を読めと言っているわけではなく、別に下心があるのだという（3巻：128）。

これが、厦門大学での講演で、経書を読めと主張する人たちには、たいてい別の下心があり、彼らは人々に経書を読ませることで従順な民や節操をかたく守る女子となるようしむけ、そうすることで自分はふんぞりかえって人々を踏みつけにすることができたのだ、と言っていることにつながる。

魯迅に言わせれば、経書を読めと本気で言っているのは救いようのない愚か者か、そうでなければ、自らの利益のために言っているだけの計算高い連中であり、経書を読めば国を救えるなどとは本気では思っていない、ということになる。

10月16日づけ『兩地書』(56)にこの講演のことが書かれている。

ここの校長は尊孔です。このあいだの日曜日〔実際は木曜日〕、週会で話をしてくれと言うので、例によって私流の「中国の書物はあまり読まぬこと」主義と、それから学生は「おせっかい焼き」たるべしという話をしました。〔すると〕彼は急に、大いにそのとおり、陳嘉庚もまさに「おせっかい焼き」だからこそ、自ら進んで学校をおこそうとしたのだと言い出したのですが、自分の尊孔と矛盾することには気づいていない。こんなふうにはここはめっちゃくちゃなのです。（11巻：158）

10月18日づけの『兩地書』(75)には、林文慶との直接的なやりとりが書かれている。

国学院も外見を飾るばかりで、中身がありません。教員の業績をしょっちゅう問い合わせてくるので、先週、腹に据えかねて校長に言ってやった。自分はもともと古小説を10本編集しおわっていて、あとは少し手を入れるだけだ、学校がそんなに急ぐのなら、今月中にも印刷にまわ

しますよ、と。すると、それから連中はうんと
もすんとも言わなくなりました。原稿がないと
なると毎日のように催促してくるくせに、出来
上がってみると、本当に印刷する用意はしてい
ないのです。(11巻：204)

これは、この後、厦門大学に辞表を提出した12月
31日に書かれる「厦門通信(三)」に出てくる逸話と
同じことを指していると思われ、「古小説を10本編纂
しおわっていて」というのは魯迅が厦門大学に出版
援助を期待していた『古小説鉤沈』のことというこ
とになる。

10月21日、魯迅は民国期の仏教改革を主導した太
虚が招待された晩餐会に参加している。出席者は30
人あまり。魯迅は太虚をありがたがる人々を冷やか
かに見ている(11巻：163, 167)。

以下次号

*本研究はJSPS 科研費(JP20K00085)の助成を受
けたものである。

注

- 1) 林文慶の名を題目に含む日本語での研究として
は、明石(1981)、山本(1995)、山田(2011a,
2011b)、持田(2012)がある。また、篠崎(2001,
2017)は林文慶を取り巻く背景を知るうえで参考
になる。
- 2) 以下、魯迅の中国語の文章については、1981年
刊の人民文学出版社版『魯迅全集』(魯迅 1981)
の巻数とページ数を示す。訳出にあたっては同書
の全訳である学習研究社版『魯迅全集』(相浦ほか
編 1984)、および岩波書店版『魯迅選集』(増田・
松枝・竹内編訳 1986)の訳文を参考にし、2005年
刊の人民文学出版社版『魯迅全集』(魯迅 2005)
も参照した。
- 3) 以下、引用文中の〔 〕は住家による挿入。
- 4) 林文慶の経歴については、严(2010)および張
(2012)の年表とそれに関連した本文を基礎として、
作者不詳(1969)、李(1991)を参照のうえ作成し
た。
- 5) 林文慶の名前は、日本語の論文などでは「リム・
ブーンケン」「リム・ブンケン」、英語のまま「Lim
Boon Keng」とさまざまに表記されている。以下、
本稿では「林文慶」と表記する。
- 6) 魯迅の経歴については、飯倉(1980)および藤
井(2002)を参照した。
- 7) 以下、魯迅の行動については、魯迅博物館/魯
迅研究室編(2000)を基礎とした。
- 8) 魯迅が「私は今、もし授業に出るなら96の石段
を昇り降りしなくてはなりません」(11巻：119)
と書いたことを踏まえていると思われる。
- 9) 見やすくするため、原文にはない改行を加えて
いる。
- 10) 論語・里仁第四。「一つのことで貫かれている」
「一つのもので統一されている」というのが一般的
な解釈だが、「すべてを実践する」といった解釈も
あるという(吉川 1996：114-7)。
- 11) 孟子・尽心章句下。「国家においては人民が何よ
りも貴重」(小林 1972：398)の意。
- 12) 原文では「一語即不見其對於政治主張概略矣」
だが、意味が通らないため、「不」を「可」と改め
てこの記事に掲載している薛(1983：108)に従っ
た。
- 13) 孟子・尽心章句下。「もし『書経』に書いてある
ことを、一から十までことごとく鵜呑みにして信
用するくらいなら、[かえって人を誤ることもある
から]むしろ『書経』などはない方がよい」(小林
1972：387)の意。
- 14) キョンシーは死体の妖怪。この後の、外国の書
物には「生きた人間の退廃や厭世」があるという
記述と対になっていると解釈した。死んでそのま
ま固まったような楽観であって現在の世の中には
通用しない、という意味か、あるいはキョンシー
は生きた人間に害をなすともされるため、死者が
残した楽観的な考えが現在を生きている人間にと
って害となる、というようなことを意味している
と思われる。

文献

〔日本語〕

- 相浦杲ほか編, 1984, 『魯迅全集』学習研究社。
- 明石陽至, 1981, 「シンガポール華人改革指導者林文慶と文化摩擦」永積昭編『東南アジアの留学生と民族主義運動』巖南堂書店, 103-141。
- 藤井省三, 2002, 『魯迅事典』三省堂。
- 飯倉照平, 1980, 『人類の知的遺産69 魯迅』講談社。
- 小林勝人訳注, 1972, 『孟子（下）』岩波書店。
- 増田渉・松枝茂夫・竹内好編訳, 1986, 『魯迅選集』改訂版11刷, 岩波書店。
- 持田洋平, 2012, 「シンガポール華人社会の「近代」の始まりに関する一考察：林文慶と辮髪切除活動を中心に」『華僑華人研究』9, 7-27。
- , 2017, 「康有為のシンガポール滞在（一九〇〇年）とその華人社会への影響に関する考察」三田史学会『史學』87（1・2）, 87-105。
- 篠崎香織, 2001, 「シンガポールの海峡華人と「追放令」：植民地秩序の構築と現地コミュニティの対応に関する一考察」『東南アジア－歴史と文化－』(30), 72-97。
- , 2017, 「プラナカンの誕生：海峡植民地ベナンの華人と政治参加」九州大学出版会。
- 山田洋, 2011a, 「Lim Boon Keng と Lee Kuan Yewk: Straits Chinese の言語政策を巡る考察」『日本大学大学院総合社会情報研究科紀要』No.12, 41-53。
- , 2011b, 「シンガポール多元主義の中での Lim Boon Keng 再評価：Straits Chinese を巡る比較文化論的考察」『国際情報研究』8（1）, 35-46。
- 山本信人, 1995, 「リム・ブーンケンによる「近代的中国」の創造：「進歩」の時代における初期南洋華人ナショナリズム研究試論」慶應義塾大学法学研究会『法学研究』68（5）, 27-66。
- 吉川幸次郎, 1996, 『論語（上）』朝日新聞社。

〔中国語〕

- 陈梦韶, 1983a, 「魯迅先生在厦門大学」薛绥之主编『魯迅平生史料汇编第四辑』天津：天津人民出版社, 78-93。
- , 1983b, 「魯迅在厦門的五次演讲」薛绥之主编『魯迅平生史料汇编第四辑』天津：天津人民出版社, 94-106。
- 李元瑾, 1991, 『林文庆的思想：中西文化的汇流与矛盾』Singapore：新加坡亚洲研究学会。
- 魯迅, 1981, 『魯迅全集』北京：人民文学出版社（=和訳：相浦杲ほか編, 1984, 『魯迅全集』学習研究社）。
- , 2005, 『魯迅全集』北京：人民文学出版社。
- 魯迅博物館／魯迅研究室編, 2000, 『魯迅年譜 增訂本第二卷』北京：人民文学出版社。
- 『厦大周刊』158期, 1926年10月9日。
- 厦門大学中文系, 1978, 『魯迅在厦門（修訂本）』福州：福建人民出版社。
- 薛绥之主编, 1983, 『魯迅平生史料汇编 第四辑』天津：天津人民出版社。
- 严春宝, 2010, 『一生真偽有谁知 大学校长林文庆』福州：海峡出版发行集团, 福建教育出版社。
- 俞荻, [1956]1983, 「回忆魯迅先生在厦門大学」薛绥之主编『魯迅平生史料汇编第四辑』天津：天津人民出版社, 56-64。
- 张亚群, 2012, 『自强不息 止于至善：厦門大学校长林文庆』济南：山东教育出版社。
- 作者不詳, 1969, 『林文慶傳』出版社不明（東京大学東洋文化研究所図書室蔵本）。
- 〔英語〕
- Wang Gungwu, 1991, *China and The Chinese Overseas*, Singapore: Times Academic Press.

